遊戯王GX－竜の決闘者－

甘味屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ―竜の決闘者―

【Ｎコード】
Ｎ６３６４Ｔ

【作者名】
甘味屋

【あらすじ】
今年で高校三年生になる雨宮和音は、高校二年間のだらけきった生活態度を改め、大学進学に向けて努力することを決意して眠った。が、何故だか気付くとデュエルアカデミアの実技試験会場でデュエルディスクを構えていた！「え？ナニコレ？最近流行の異世界トリップ！？」とある理由から元の世界に帰るために、和音はデュエルアカデミアに入学する。そしてそこで十代達やヒロイン達と一緒にＧＸの世界を謳歌する！作者は初心者です。アドバイスや感想をもらえると幸いです。

第一話「入学試験」

第一話「入学試験」

はい皆様コンニチハ。今年で高校三年生になる雨宮和音（あまみや かずね）です。
赤点こそ取っていないもののそれに等しい内申の俺は、今年こそゲームをしないで大学進学のために頑張るぞーっ！！と意気込みを入れて昨晩ベッドに入った。
うん入ったんだ。入ったはずなんだけど……、

「え、ナニコレ？夢？」

目が覚めたら目の前には青い制服（？）を着たリーゼントと黒いサングラスの男が立っていた。
しかもその腕についているのは昔サンタクロースに欲しい願ったデュエルディスクが装備されている。

「どうした？受験番号６３番。はやくデュエルディスクを構えなさい」

目をパチクリしているこっちを不審に思ったのか、先生（俺の記憶が正しければＴＦと言うゲームに出てくる教師のはずだ）が心配そうに声をかけてくる。

「あ、ハイ！大丈夫です」
「そうか、なら始めよう」

慌てて答えると、先生はデュエルディスクを構える。

「デュエル！」

「デュ、デュエル！」

俺も見よう見真似でデュエルディスクを構えた。

「私の先行。私のターン、ドロー！」

あれ？何コレ？場の空気に流されてデュエルディスクを構えちゃったけど、これってもしかして遊戯王ＧＸの入学試験なんじゃないか？

だとしたら異世界トリップ？

「私は手札から≪マンジュ・ゴッド≫を守備表示で召喚！その効果により、デッキから≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫を手札に加える。さらにカードを二枚伏せてターンエンドだ」

≪マンジュ・ゴッド≫ＡＴＫ１４００

頭に疑問符ばかりを浮かべている俺をよそに、先生はわりと堅実な手でターンを終了した。

というかアレだよな。『ふっふっふ、先行は早い者勝ちだＺＥ！』理論には色々と突っ込みたいものがある。だって先行が明らかに有利なデッキってあるじゃん？バーンとかロックとか。この世界だとライフポイントが４０００だから、下手した１ターンキルされるかもしれないし・・・・・。まぁアニメとかだとバーンデッキとかは敬遠される傾向にあるから大丈夫だとは思うんだけど……。

「受験番号６３番、君のターンだ。それとも怖気づいたかね？」

むっ、そのあからさまに馬鹿にしたイントネーションに少しイラつく。

「いえ。大丈夫です。俺のターン、ドロー！」

とりあえずアレだ。このデュエルに勝ってから考えよう。
初手から考えるに相手の切り札は≪終焉の王デミス≫か≪破滅の女神ルイン≫だろう。≪高等儀式術≫ではなく≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫を手札に加えたことから、手札に≪儀式の供物≫でもあるのだろうか？
まぁ、どちらにせよ関係無い。

「すいません、先生。1ターンキルさせてもらいます」
「何！？」
「俺は手札から≪大嵐≫を発動！このカードはフィールド上にある、全ての魔法（マジック）・罠（トラップ）を破壊する！」

俺がカードをデュエルディスクに差し込むと同時に、目の前に≪大嵐≫のカードが出現し、そこから吹き荒れる暴風が先生の二枚の伏せカードを破壊する。
破壊されたのは≪聖なるバリア　―ミラーフォース―≫と≪強制脱出装置≫。攻撃反応型とフリーチェーンの罠（トラップ）だ。

「ぐおおおっ！？」
「さらに手札から装備魔法≪未来融合―フューチャー・フュージョン≫を発動する。このカードは融合デッキからカードを一枚選択し、そのカードの融合素材となっているモンスターをデッキから墓地に送った後、選択した融合モンスターを融合召喚する。俺はF（ファイブゴッド）・G（ドラゴン）・Dを選択！！」

俺はデッキから≪ミラージュ・ドラゴン≫、≪ブリザード・ドラゴン≫、≪コアキメイル・ドラゴ≫、≪アックス・ドラゴニュート≫、≪マテリアルドラゴン≫を墓地へと送る。

「現われろ！Ｆ（ファイブゴッド）・Ｇ（ドラゴン）・Ｄ！！」

先程の≪大嵐≫以上の暴風と共に、現われるのは五つ首のドラゴン。

その攻撃力は破格の５０００。

「なっ、１ターン目から攻撃力５０００のモンスターだと！？」

さすがの先生も予想外だったのだろう。きっとサングラスの奥の目を見開いているに違いない。

しっかしＯＣＧでもお世話になったけど、アニメの未来融合は鬼畜だよな。なにせＯＣＧ版と違って速攻で召喚できるし。

「し、しかし未来融合の効果で融合したモンスターはこのターン攻撃宣言を行えない。なら１ターンキルは不可能なはず……」

「ところがどっこい、こうすればいいんですよ。手札から速攻魔法≪融合解除≫発動！」

≪ミラージュ・ドラゴン≫ＡＴＫ１６００
≪ブリザード・ドラゴン≫ＡＴＫ１８００
≪コアキメイル・ドラゴ≫ＡＴＫ１９００
≪アックス・ドラゴニュート≫ＡＴＫ２０００
≪マテリアルドラゴン≫ＡＴＫ２４００

一瞬、Ｆ（ファイブゴッド）・Ｇ（ドラゴン）・Ｄの姿が光に包まれると、フィールド上には先程融合素材として墓地へ送った五体のドラゴンが出現する。

「いきますよ！≪ミラージュ・ドラゴン≫で≪マンジュ・ゴッド≫を攻撃。え、え～と……『ミラージュブレス』！！」
「ぐおっ！？」

ださっ！？仕方ないじゃん！俺ってネーミングセンスないんだよ！！

と、心の中で弁明しながらも、自らのモンスターに最後の指令を出す。

「これで先生のフィールド上にカードは存在しない。総攻撃しろ、俺のドラゴンたち！！」
「ま、まさか本当に１ターンキルだと……っ！？」

今度こそカッコイイ技名を言うぜっ！！

「一斉攻撃！『デストラクション・バースト』！！」

ってまたダセェよ！？

「ぐおあああああああああっっっ！！」

てかソリッドビジョンシステムってスゲェ……。本当に先生の体から黒い煙が出ているように見えるよ……。

「はい、宣言どおり１ターンキルですね。ありがとうございます」

とりあえず内心の激しい恥かしさは隠して、あくまで冷静に先生に向かって頭を下げる。

そういえば今気付いたんだけど、儀式モンスターのデッキでデュ

エルアカデミアの教師つったら木葉孝三さんだろうか？
と、礼儀正しく先生に挨拶した後、とりあえず観客席に戻ろうとした俺を見て、他の受験生や様子見に着ていた中等部上がりの生徒がコソコソと話し合っていた。

「おいおいあの受験生すごくねぇか？」「教師相手に1ターンキルかよ……」「でもアイツ、大会じゃ見たこと無いぜ」

どうやら華麗（ここ重要！）な1ターンキルを決めた俺が他のデュエル大会では見かけないことを疑問に思っているらしい。
まぁ当り前だろう。俺だってこの世界に来て十分もたっていないのだ。おそらくここで俺の顔を知っているのは一人もいないのだろう。
……しかしあの手札は出来すぎだった気がする。大体、元の世界じゃ≪大嵐≫は現在禁止である。ご都合主義にも程があるぜ。

（あれ？でもこの時期の禁止・制限では≪大嵐≫は大丈夫なんだっけ？確か十代対クロノス戦でも使ってたしなぁ……）

とりあえず後で≪ハリケーン≫にでも変えておこう、と決める。
先程、未来融合を使う際に気づいたのだが、やはり俺が元々使っていたデッキとは違うようだ。
俺のデッキは典型的な≪レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン≫（通称レダメ）を基本にしたドラゴン族ビートデッキだった。しかしGX本編では天上院吹雪がレダメ（効果は大分違うが）を使う上に、かなりの重要カードなのでデッキには入っていない。
それ以外にも≪伝説の白石≫や≪青眼の白竜≫も当然ながらデッキに入っていなかった。
エクストラデッキを見る限り、シンクロモンスターも入っていないらしく、チューナーっぽいモンスターもちらほら見えたが、どう

やらシンクロ召喚で≪ブラック・ローズ・ドラゴン≫→フィールド全壊→レダメ召喚→ドラゴン族の連続召喚フハハハハハのパターンは使用不可能ということらしい。残念だ。
と、思考に耽っている俺の肩を誰かが触った。
「やぁ、６３番。凄い１ターンキルだったな」
おや、この声は……？
「初めまして。俺は三沢大地。よろしく」
ああ、やっぱりコイツか。
三沢大地。筆記試験ＮＯ．１であり、後のラー・イエロー筆頭のデュエリスト。六属性のデッキを操る頭脳派だ。
「そんな事無いさ。偶々、手札が良すぎたんだよ」
「謙遜するな。あれは君の実力だ」
そう言われるが、元の世界じゃああの程度のコンボではおそらく止めは差せないだろう。そもそも≪竜の鏡≫を多用する俺のデッキには≪融合解除≫はかなり相性が悪い。
今回は勝手にデッキが改造されていた上、未来融合の効果がアニメ版だったため、アレぐらいの事が出来たのだ。
だが褒められて悪い気はしない。たとえ褒めてくれる相手が後の空気君であろうとも、自分のデュエルを賞賛してくれるのは嬉しい。
「ああ、言い忘れてたけど、俺は雨宮和音。受験番号で呼ぶなよ。呼び捨ててでいいぜ」
「わかった、和音」

ここで原作キャラと仲良くなっていくのはきっと悪いことじゃないはずだ。
セブンスターズやら、光の結社やらに巻き込まれるのは御免だが、出来ることなら『帰るまで』はデュエルアカデミアでの生活を楽しんでいきたい。
何事も楽しまなければ損だ。

『受験番号1番、三沢大地。試験を開始するので、デュエル場まで着なさい』

と、三沢の呼び出しアナウンスが観客席に聞こえた。

「お、次は三沢か。頑張れよ」
「任せてくれ。確実に勝ってくる」

大した自信だ。
まぁ実際に勝つのだが。

「さて、と。この後は三沢が≪破壊輪≫で勝った後、遊城十代が遅れて来るんだよなぁ」

ついでに言えば丸藤翔が苦戦するワンシーンがあったはずだ。
このときの翔は正直言ってレベルが低く、かなり弱い。

「とりあえずトイレにでも行って、十代が来るのを待つかな。その後はデッキの内容確認でもするか……」

そう言って俺は観客席を後にした。

第一話「入学試験」（後書き）

どうも、甘味屋です。
オリジナル小説のデータが半年前に吹き飛んで放心状態だったのですが、ＴＦ５をやっていたら突如として『そうだ、遊戯王の二次創作を書こう！！』といった気分になり、衝動的かつ突発的に書きました。
え？どうしてＴＦ５をやってＧＸの世界観なんだって？ＨＡＨＡＨＡ、それは決して作者がＧＸぐらいしか遊戯王を見ていないからとかじゃないＺＥ！
まぁとりあえず今後ともよろしくお願いします。

第二話「猪突猛進」（前書き）

遊戯王ＧＸ小説なのにＧＸキャラが出てきません。
その上、デュエルもしません。あれ？どうしてこうなった。

第二話「猪突猛進」

第二話「猪突猛進」

今さらながら重要なことに気が付いた。
俺は高校三年生になって決意新たにベッドに入ったのだが、何時の間にやら遊戯王ＧＸの世界に飛ばされた上、デュエルアカデミアの実技試験会場でデュエルをし、教師相手に圧勝して、誰もいないトイレで今の状況を再確認しようと思っていたのだが……。

「何故だ！？　遊戯王ＧＸの世界にトリップした奴には霊使いとか、ピケルとクランとか、雷電娘々などのカワイイ精霊がセットになっているんじゃなかったのか！？」

その通りだ。
大抵の場合は主人公にカワイイ女の子の精霊がセットで付いて来る筈なのだが、俺のデッキにはかわいい女性モンスターは勿論の事、マスコットになるようなモンスターすら入っていない。
ぐっ！せめて≪デコイドラゴン≫ぐらいは入れておくべきだったか！？

「ま、まぁいいや。せめてＦ・Ｇ・Ｄ（ファイブゴッド　ドラゴン）とかが精霊化しなくてよかったと思おう……」

確かにカッコイイかもしれないが、自分の背後に五つ首のドラゴンが絶えず浮遊しているとなると怖いこと間違い無しだ。

「それにしても若返ったなぁ」

精霊の一件については置いといて、俺はトイレの鏡に映る自分の姿を見て声を漏らした。

元々の身長は同世代のほうでも高いほうである１８０センチ後半はあったのだが、実を言えば俺の身長は基本的に高校生になってからグングン伸び始めたのである。今の体は外見的に中学三年生当時なのだが、身長が２０センチ近く縮んでいて、多分１７０センチもないだろう。

そのせいか歩く時にも足の長さが違ったり、物を取る際にも腕が短かったりして動き辛い。

そのうち慣れるだろうが、今は軽く走っただけでも転べそうだ。

アカデミア入学前に体を慣らしておかなくちゃな。

「さて、と。そろそろ三沢も勝つ頃だろ。十代も遅れてくるだろうし、ソリッドビジョンシステムの素晴らしさを再認識したいしな」

さっきはトリップした直後で気が動転していたけど、やっぱのこの立体映像って凄いよなぁ。

なにせ数千種類ものカード全てに個々の立体映像がついていて、まるで本物さながらのように動くんだもの。

流石は社長。いい仕事をしてらっしゃる。

「やっぱ見所は≪古代機械の巨人≫と≪Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン≫の激突のシーンだよな……。≪摩天楼　―スカイスクレイパー―≫も大分好きなデザインだし……」

これから見れるであろう名シーンを思い浮かべて頬が緩む。

「どうにしても楽しみだ「ど、どいてくださぁぁぁい！！」ごふぅ

っ！？」

と、考え事をしているのが悪かったのだろうか。それとも縮小した体に慣れていなかったせいなのだろうか。トイレを出た瞬間に、廊下を爆走していた誰かに反応できずぶつかってしまった。

「ぐ、ぐおおおおっ！？　腹部が、鳩尾がぁ……ッ！？」

「うわわわわ！？　まるで美しい晴天の青空のように真っ青な顔になってしまっているです！！　大丈夫です？」

しかも運の悪いことに鳩尾に肘鉄がクリティカルヒットしたらしい。

溢れる嘔吐感を必死に抑えていると、可愛らしい声とともに背中がさすられる。

「だ、大丈夫だ、問題ない……ごふっ」

「良く分かりませんけど、その台詞は死亡フラグな気がするです！！」

ふっ、だがしかぁし！この台詞には続きがある！！

「神は言っている。ここで死ぬべきではないと」

「へ？」

「と、言うわけで……。お嬢さん、男子トイレの前を全力疾走は良くないぜ。俺が紳士だから何も無かったけど、もしも相手が君のような可愛い子を襲う変態だったら大変なことになっていたぞ」

「も、もう平気なんです……？」

「何がだ？」

「いや、あの、鳩尾に肘が……」

ＨＡＨＡＨＡ、可愛い女の子の肘鉄程度、この鍛えあげられた俺の腹筋には無力！！
ん？さっき悶えていたって？演技だ！！……と言うのはジョークで、大分痛みが引いてきただけである。
「大丈夫、大丈夫。デュエリストたる者、まずは健全かつ強固な肉体からだからな」
だってほら、リアルファイトを披露したアモンやコブラは勿論の事、三沢とか十代も結構な肉体をしている。きっとレベルの高いデュエリストは皆、筋肉ムキムキなんだよ。カイザーとかも脱げば凄いんだぜ。
「よ、よかったぁ……。試験前に騒ぎになったらどうしようって思ったです」
「ん？　お嬢さんもデュエルアカデミアの入学希望者？」
そう問うと、女の子（銀髪ショートカット。外人さんだろうか？）は顔を輝かせる。
「ハイ！　受験番号６４番、星崎（ほしさき）カノンです！」
「へぇ、カノンちゃんって言うんだ。俺は雨宮和音。受験番号は６３番だ」
「わわっ！　私よりも受験番号が上です！　敬わなければいけないです、雨宮さん！！」
そんな事を言ったら、後６２人は尊敬対象がいるぞ、カノンちゃん。
って言うかやっぱＧＸの世界は外見で判別できないな。銀髪碧眼って外国人かと思ったけど、名前からして日本人じゃないか。ハー

フかもしれないけど、外見には日本人らしさなんて無いぜ。

「さんはいいよ。呼び捨てにしてくれ」

「いいえ！　廊下を爆走してぶつかってしまった私を笑顔で許してくれた雨宮さんは、受験番号がたとえ下でも尊敬に値する人です！　ぶちゃっけ見た目があんまり頭良さそうに見えなくて、私よりも受験番号が下だと思っていました、ハイ！」

「正直だなオイ。今ここでデュエルするか？≪F（ファイブゴッド）・G（ドラゴン）・D≫で、粉砕・玉砕・大喝采するぞ」

ちなみにF（粉砕！）・G（玉砕！）・D（大喝采！！）なんだぜ？知ってた？

「いいえでしょう。受けてたつです！　私の『代行者』でボコボコに――――」

「あ～、盛り上がってるところすまないが君達。ここは廊下でね。出来ることならばデュエルは他の人の迷惑にならない、外でやっていただきたいのだが」

と、デュエルディスクを構えたカノンの後ろから男の声が飛ぶ。

「え～と、誰です？」

「ボクのことかい？　僕はデュエルアカデミア二年、オシリス・レッドの黒峰冬哉（くろみねとうや）と言う」

「せ、先輩です！？」

慌ててカノンが後ろを振り向き、直立不動の姿勢をとる。

俺も急いで立ち上がってお辞儀をした。

「ハ、ハジメマシテ！　私は受験生の星崎カノンです！！」

「同じく受験生の雨宮和音です」

俺たちが揃って挨拶をすると、黒峰先輩（この人は髪の毛が黒く、日本人らしい。けど腰届くほど長くて、一本に縛っている）は掛けているメガネを指で持ち上げると、人の良さそうな笑顔を浮かべた。

「おっ、礼儀正しい後輩だなぁ。君達のように優秀な受験生は大抵の場合、オシリス・レッドの生徒というだけで見下すもんなんだけど」

「そんなのは自分の実力を過信してしている奴だけです。たとえどれほど実力が高くても、一時の相性や運で負けてしまう事だってありますから」

「そうです！　それに年上は無条件で尊敬対象です！　それがこれから私が通うことになるデュエルアカデミアの先輩とあらば尚更です！！」

「ははっ、嬉しいことを言ってくれるね」

だが事実だ。世の中、たとえ相手のデッキが強かろうとも素晴らしいチートドロー（主に十代とか十代とか）で形勢を逆転したり、連戦連勝していたデッキがそこらへんの予選敗退するようなデッキに敗北することがある。だからデュエルは楽しい。

それに寮のランクが上でも先輩を見下すのは間違っている。年功序列は時として間違っている場合も多いが、それでも学校の先輩とは基本的に敬うものなのだから。

「うん。君達のように礼儀正しくて、デュエルの腕前もいい生徒が入ってくれるとボクも嬉しいよ。やっぱりデュエルは相手が違えば違うほど楽しいからね」

ニコニコと本当に嬉しそうな顔で笑う先輩。

「そうだ。二人ともデュエルをするんだろう？　だったら僕も混ぜてくれないか？」
「え？　先輩がです？」
「ああ。ドロップアウトの僕じゃあ相手にはならないかもしれないけど、君たちとデュエルするとなんだか楽しそうだからね」

そう言って先輩は背中に背負っていたバッグからデュエルディスクを取り出す。
やる気満々なのか馴れた手つきでディスクを腕に装着した。って言うか、さっき外でデュエルしてくれって忠告したのはどこのどいつだっけ？

「わかったです！　先輩と言えど容赦はしないです！！」

どうやらカノンも俄然やる気らしい。
仕方ない。ここはこの場の空気を読んで俺も……、

「いたいた！　いやがったわね、星崎カノン！！」

と、俺もディスクにデッキをセットしようとした時、女の子の怒声が狭い廊下に響き渡った。

「へ？　あ、あなたは誰です？」
「誰、じゃないでしょ！　あたしは朱鷺宮遥（ときみやはるか）。アンタ達受験組とは違って、中等部からのエリートよ！　これでも中等部の女子の中じゃあ、有名なんだからね！」

あれか。万丈目や天上院と同じエリート組って奴らか。確かに着ている制服は黒峰先輩の真っ赤な制服とは対象に、どこか高級感を

漂わせる青だ。
　でもＴＦやＧＸのアニメを見ると、本当にブルーの奴等が強いとは思えないんだよなぁ……。テニス部部長とか万丈目の取巻きＡ、Ｂとか。
　それに女子の実力は天上院明日香とかの例外を除けば対して強くないはずだ。この茶髪の女も、自分で言うほど強くないのかもしれない。

「それで。その自称エリートさんがカノンに何のようだ？」
「そうです。どうしましたです？」

　カノンが小首を傾げると（超カワイイ）、朱鷺宮は一瞬呆けたような表情になると、盛大に溜息をついた。

「……カノン。アンタ今日は何のためにここに来たの？」
「何って、そんなの一つしかないじゃないです」

　あ、話が読めてきたかも。

「昔からの夢だったデュエルアカデミアに入学するために実技試験を受けに来たんです！」
「だぁったら、さっさと実技試験会場に向かいなさいよ！！」

　やっぱり。

「へ？」
「アンタが受付を終えたって連絡が届いたのはいいけど、何時まで経っても試験会場に来ないから、クロノス先生から呼ぶようにって言われきたのよ！！」
「あ、あああああああっ！？　しまったです！　さっき廊下を爆

走してたのは、道行くお婆さんに親切心から道を教えていたら電車に乗り遅れて、バスで行こうとしたら交通事故で足止めを喰らって、最終的に己の足で試験会場までの道のりを踏破した結果、受付ギリギリの時間についたからです！！」

随分と素晴らしい過程だな、オイ。

「はぁ～。仰々しい説明はいいから、実技会場まで行きなさい。クロノス先生、他の受験生に負けてイライラしてるんだから。早くしないと試験させてもらえないわよ」

「わ、わかったですぅぅぅ！」

カノンは試験を受けさせてもらえないかもしれないという恐怖から、目頭に涙を浮かべて再び爆走を開始する。

足速いな。俺も運動神経は悪いほうじゃないけど、カノンには負けるかもしれない。

女子（しかも小柄）に負けるってのは少し男のプライドに触るな。よし、明日からマラソンでもしよう。

「あ、そうだ。雨宮さん！」

もう大分廊下の先まで走っていったカノンがこちらに振り返り、大声を上げる。

「今度、デュエルしましょうね！！　楽しみにしているです！！」

そしてこちらの返事も待たずに、カノンは走り出してしまった。

嵐のような子だったな。でもカワイイし、デュエルアカデミアに入れたら友達になってもいいかもしれない。

「あ～、そういえばアンタが教師相手に1ターンキルを決めたって受験生だっけ」
「ん？ああ、まぁそうだけど」
手札が良すぎただけだけどな。
「アンタぐらいの実力なら、ラー・イエローに入るぐらい余裕だろうけどさ、気をつけなさいよ」
「何をだ？」
「誰もが相手の実力を認められるとは限らない、ってことよ」
……少しこの女の評価を改めることにした。
今の会話からして、朱鷺宮は受験生とは言え教師相手に1ターンキルをした俺を、多少は認めているということだ。
エリート意識で凝り固まったただのブルー生徒ではないらしい。
「そんじゃあね。もしもアンタがアカデミアに入ったら、そのうちデュエルでもしましょ」
「あ、ああ。楽しみにしてるぜ」
ヒラヒラと後ろ向きに手を振っていく朱鷺宮。
そのうち彼女も廊下の曲がり角で見えなくなる。
「さて、と。俺も実技会場に行くか……。あれ？」
そこで俺は一つ気が付いた。
「黒峰先輩？」
何時の間にか黒峰先輩が消えている事に気が付いたのだ。

そういえば朱鷺宮が出てきた辺りからいなかった気がする……。

「ま、いっか。アカデミアに入れば会えるだろう」

どうせ十代たちがいるレッド寮だ。あそこは小さいから、それなりの確率で会えるはずだ。

「んじゃ、カノンのデュエルでも見せてもらうか」

そう。おそらく彼女は俺と同じ『イレギュラー』。GX本編では十代のあとに遅れてやってきた生徒なんていなかった。彼女と関わっていけば、もしかしたら帰る手段が見つかるかもしれない。

それにさっきの会話から彼女のデッキが『代行者』であることもわかった。これには興味がある。なにせ元の世界での『あいつ』が使っていたデッキなのだから。

そして俺は、少し急ぎ足で実技試験会場まで向かうのだった。

～SIDE　黒峰冬哉～

まったく、まさかあのタイミングで遥が出てくるとは思わなかった。

久しぶりに『楽しい』デュエルが出来ると思ったのに。

「まぁ、大丈夫だろうね。和音君たちなら余裕でアカデミアに入れるだろうし」

入学試験での彼の実力を見る限り、ラー・イエローに配属される

ことは確実だろう。さらには『あの』星崎カノンならば入学試験程度、軽くクリアしてしまうに決まっている。

「さて、僕は一足先にアカデミアに帰るとするか。遥や逸紀（いつき）に気付かれないうちにね」

そういってボクは、隠れていたトイレの個室から出る。

最後に一言、楽しげに笑って、

「今年のデュエルアカデミアは楽しくなりそうだ」

そう呟いた後に。

第二話「猪突猛進」（後書き）

次回は当然、デュエルパートです。

第三話「実技試験」（前書き）

すいません。前回の後書きで今回はデュエルパートだと宣言したのですが、予想外に会話が長引いてしまったので、デュエルパートは次回に回しました。
ついでに結構な超展開です。

第三話「実技試験」

第三話「実技試験」

「さぁ、デュエルです！　雨宮さん！」

デュエルアカデミア実技試験会場のデュエルフィールどのど真ん中で、カノンは俺を指差して叫ぶ。

観客席も『あの』星崎カノンと、試験とは言え教師相手に１ターンキルを決めた俺がデュエルするとなって、先ほどの十代ＶＳクロノス以上の熱気に包まれていた。

「あなたのブルー寮行きを阻止してしまうのは申し訳ないですけど、このデュエルには長年夢見てきたデュエルアカデミア入学が掛かっているんです！　私と『代行者』に敗北は許されません！！」

そう言って真剣な目つきでデュエルディスクを構えるカノン。

闘志溢れるその姿から、どれほどこのデュエルに勝利しようと考えているかが痛いほど分かった。

おそらく全力で来るだろう。自信の持てる力全てを出し切って、その上で俺を完膚なきまでに敗北させる気だ。

「さぁ構えてください！」

だが俺は一つ問い質したいことがある。

些細なことだ。

（どうしてカノンの実技試験の相手が俺になるんだ……？）

――――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

～ＳＩＤＥ　雨宮和音～

「お前が雨宮和音か～。オレは遊城十代。よろしく！」

トイレから帰ってきた俺は、実技試験会場の観客席で手を振っていた三沢大地の方へと向かうと、その側に立っていた自称一番ことＧＸの主人公・遊城十代から挨拶された。

こちらの返事も待たずに十代は手を取り、ブンブンと痛いほどに握ってくる。

「試験管の先生相手に１ターンキルを決めたんだろ？　くぅ～、オレも見てみたかったぜ！」

「いや、あれは手札が良すぎただけだ。実際にやればもうちょっと苦戦した」

勝てないとは思えないが、≪終焉の王　デミス≫を召喚されれば多少なりとも厄介だ。デッキから通常モンスター限定だが、直接儀式素材を送れる≪高等儀式術≫ではなく、≪エンド・オブ・ザ・ワールド≫を手札に加えたことから、≪デビルドーザー≫とのコンボデッキである『デミスドーザー』ではないと思われるため、１ターンキルをされなかったとは思うが、それでもライフが４０００のアニメルールではＡＴＫ２４００のダイレクトアタック一回だけでも――いや、その後の通常召喚も合わせた攻撃のみでライフを０にされる可能性だってある。

対処方法は色々あったにしろ、あの1ターンキルは偶然だ。まぁアニメ版ではなく、OCG版の≪未来融合 ―フューチャー・フュージョン―≫であっても対処方法は手札にあったんだけどね。≪龍の鏡≫とか。

「でも凄いッス。アカデミアの教師相手に1ターンキルなんて」

と、三沢の横の席に腰掛けていた小柄なメガネの少年が、雲の上の存在を見るような目で俺を見てきた。

「あ、ボクは丸藤翔ッス。よろしく」

十代とは違い、オドオドと手を差し出してきた。

やはり翔はまだ弱々しいな。デュエルでも少し攻勢に出ただけで、自分の実力を過信するところとかは早く直してもらいたい。

「でもそんな事を言ったら、十代もアカデミア実技担当最高責任者のクロノス教諭に勝ったんだろ？」

「ああ！　マイフェイバリットカードの≪E・HERO　フレイム・ウィングマン≫と≪摩天楼―スカイスクレイパー―≫での逆転勝利だ！」

「ならそっちだって十分に凄いじゃないか。俺は勝ったとはいえ、ただの一介の教師だぜ」

「……いや、仮にもアカデミアの教師を『たかが一介の』と言える時点で凄いと思うぞ」

ん？　そうだろうか？

確かに現実的に考えたら『デミスデッキ』も十分に脅威なのだが、あくまで彼はモブキャラだ。この世界の強さの基準は基本的に『チートドロー』が出来るかどうかと言っても過言ではないだろう。

カイザー亮の初ターン≪パワー・ボンド≫・≪サイバー・ドラゴン≫三体融合、攻撃力
８０００≪サイバー・エンド・ドラゴン≫などイイ例ではないか。

「そう言う翔と三沢はどうだったんだ？」
「ああ。今の自分にできる最高のデュエルをしたと自負しているよ」
「ボクはダメっす。一応勝ったけど、凄く苦戦しちゃったし……」
「負けるよりマシさ。事実、俺がちらりと見た奴等でも、結構負ける奴が多かったぜ」

実際合格するからな、翔は。オシリス・レッドだけど。

「デュエル内容で合否が決まるけど、やっぱり勝った奴のほうが合格しやすいのは当り前なんだしさ。翔は精一杯やったんだろ？　なら後は、果報は寝て待てだ」
「う、うん。そうだよね……。よし！　ボクは合格した！　合格したんだー！！」

ホントに乗せやすい性格だな。
うおーっ！！　と、背後に炎が見える翔をほっといて、俺は三沢と十代の方へと向く。

「そういや、二人ともどうして残ってるんだ？　もう試験は終わったし、帰ってもいいんじゃないか？」
「いや。後一人残っているらしい。十代の後に受付をして、もうすぐ試験を開始するんだとさ」
「それにそいつ、なんだかスッゲェ決闘者（デュエリスト）らしいぜ！　いくつもの大会で優勝してるんだってよ！！」

……おそらくカノンなのだろう。と、言うよりも質問をする前か

ら返答は分かっていたりする。研究家の三沢とデュエル好きの十代のことだ、他の受験生がデュエルするというのに帰る道理はないのだろう。

（しっかし……幾つもの大会で優勝？　見た目からは判断できないくらい強い、ってことか）

そこが一番の驚きである。

『代行者』とは現実世界でも強い部類に入るシリーズだったが、そもそもGXの時代には≪マスター・ヒュペリオン≫や≪神秘の代行者アース≫は存在しないはずだ。

アニメの世界に出てるキャラは基本的にシリーズ統一している奴が多いので、おそらくカノンは『代行者』という括りでデッキを構成しているはずである。だから『ヘル・サターン1キル』などのデッキではないだろう。

だとすれば大前提として≪マスター・ヒュペリオン≫は史実を無視して存在している……？

と、思考に耽っている俺の耳に驚くべき室内放送が飛び込んできた。

『あ～、あ～、シニョール雨宮、シニョール雨宮、観客席に居るなら、今すぐデュエルフィールドに降りてくるノ～ネ』

この声、クノロス教諭？

GXの名物教師であり、『古代機械（アンティーク・ギア）』シリーズを使うデュエルアカデミア実技担当最高責任者。名言や迷言を多々残しているGX屈指のネタキャラだ。

しかし何の用だろうか？　異世界トリップのテンプレの如く、俺は試験に遅れてきたわけではない。大多数の生徒と同じように、試験管の先生とまともな（1ターンキルだったが）デュエルを行ない、

それなりに優秀な成績を残しているはずだ。

（まさか……さっきのデュエルで積み込みでもしていると疑われたか？）

それは困る。この世界ではイカサマは決闘者（デュエリスト）として最もやってはいけない行為の一つであり、一生後ろ指を差されるレベルであるはずだ。

しかもこの観客席の何処かにはカイザーや天上院明日香が観戦に来ているはずなので、変な疑いを持たれてアカデミア生活に支障が出たりしたら絶対に嫌である。

「雨宮、呼ばれるぜ？」

「なんの用だろうな？　もう君の試験は終わっているというのに……」

「あ、まさか1ターンキルしたから――」

ん、翔も同じ可能性に行き着いたのだろうか。

「――特別待遇でデュエルアカデミアに入学させてもらえるのかも！？」

「……んな馬鹿な」

その可能性は皆無に等しいだろう。

まさか試験で1ターンキルをしたからといって、中等部組でない俺がオベリス・ブルーに入れてもらえるはずが無い。

そんな戯言を言っている翔に笑顔で「だったらいいのになぁ」と同調すると、俺は他の受験生の奇異の視線を一身に背負ってデュエルフィールドに向かっていった。

～ＳＩＤＥ　星崎カノン～

「オ～、アナタがシニョール雨宮？　入学試験で木葉センセイ相手に１ターンキルで勝った、優秀な受験生だって聞いているノーネ」

観客席から降りてきた雨宮さんは駆け寄ってきたクロノス先生に驚いたのか、一瞬助けを求めるように私を見た。

だけど私の切羽詰った表情を見るなり、言葉を失ってしまいました。

おそらく私は今、とても怖い顔をしているのでしょう。観客席からも小声で「こ、こえ～」などの声が聞こえます。

しかしそんな事を気にしていられないのです。

「クロノス先生、どうして自分が呼ばれたのですか？　今は星崎さんの試験じゃないんですか？」

「そのことなのデス～ガ、シニョーラカノンは試験時間から大幅に遅れて来たノーネ。いかな理由があっても、ただデュエルを受けさせるのは他の受験生に示しが付か無いノーネ」

「でもそれは不慮の事故で……」

「それならそれで、受付を終えてからすぐに来ればよかったノーネ。どこで寄り道をしていたのかは知らないデス～ガ、遅刻したにもかかわらず、それを反省する態度が無い者に試験受けさせるにはいかないノーネ」

それは当り前の事です。
そもそも私が遅れたのは困っているお婆さんを助けたからです。
それを無視すれば、私は試験に遅れることは無かったのです。

「デス～ガ、シニョーラカノンは数々のデュエル大会で優秀な成績を収めている上、鮫島校長からのお達しで試験を受けさせなくてはいけませンーノ」
「そこに自分が呼ばれる理由が無いと思うのですが……？」

甘いですよ、雨宮さん。
いかに入学試験とはいえ、アカデミアの教師相手に1ターンキルをした者が特別視されるのは当然です。

「そこで考えたデス～ノ。入学試験で優秀な成績を残したアナタに～、シニョーラカノンの実技試験の相手をしてもらうことにするノーネ」

そう。これが私に出された実技試験。
教師を相手に1ターンキルをした超優秀な受験生、雨宮和音とのデュエルで合否を決める。
実は筆記試験NO．1の三沢大地との案もあったのだが、私からの希望で雨宮さんにしてもらったのです。

「え、しかし……」
「しかも！　このデュエルにアナタが勝てば、特例でオベリスク・ブルーへの編入も許可されるノーネ」
「オベリスク・ブルーって……確か中等部上がりの生徒の中でも優秀な者しか選ばれないはずでは？」
「だから特例デスーノ。そもそも、アナタ程の実力ならすぐにオベリスク・ブルーへの昇格するに決まっているノーネ。少～し、昇格

が早まったと思えば問題ないデスーノ」

困ったような表情をする雨宮さん。

どうやらさっき知り合ったばかりとはいえ、知人を踏み台に自分の栄誉を得るのが嫌なようです。

でも……、

「大丈夫ですよ、雨宮さん」

私は出来る限り笑顔で近付いて、話し掛けた。

「あなたは私を倒してオベリスク・ブルーに入るのが嫌なんですよね？」

「あ、ああ。友達を踏み台にしてまで入る価値なんか……」

「っ」

その言葉に少しだけ胸が痛むです。

知り合って間もない私を友達と言ってくれる。おそらくほんの二十分前の私なら、飛び上がって喜んで、雨宮さんに抱きついたに違いないです。

だけど、ここで私は退くわけにはいかないのです。

ずっと昔から胸に抱きつづけている『約束』を叶える為に、私に敗北は許されない。

「その心配は杞憂です。私はあなたに負けません」

雨宮さんの表情が、固まる。

「だから」

私は腰に掛けていたケースからデッキを取り出し、デュエルディスクに挿入する。

「デュエルです！　雨宮さん！！」

叫ぶ。たとえそれが虚勢であろうとも、私はここで雨宮和音に勝利することを誓う。

「あなたのブルー寮行きを阻止してしまうのは申し訳ないですけど、このデュエルには長年夢見てきたデュエルアカデミア入学が掛かっているんです！　私と『代行者』に敗北は許されません！！」

おそらく雨宮和音は強い。

1ターンキルをしたという話からではなく、何故だか分からないけれども纏っているオーラが違った。今まで戦ってきた大会の参加者とは桁の違う――――昔見た『彼』と似た闘志を放っていた。

「さぁ構えてください！」

でも負けられない。

敗北は許されない。

勝利する以外に、私に今日を生きている資格は無い。

「勝ちます！　あなたに！！」

私のデュエル、その全てを費やしてでも！！

―――――――――――――――――――――

～ＳＩＤＥ　雨宮和音～

「さぁ構えてください！！」

どうやら翔の想像は当たっていたらしい。
１ターンキルとはここまで重要だったのか～、としみじみ思う。元の世界じゃ、割と１ターンキル（もしくは１ショットキル）するデッキはかなり多かったので。そこまで珍しくも無いだろう、と高を括っていた。
が、結果はコレだ。ヤバイ、ヤバイ、予想以上に目立ってる。このままでは元の世界に帰る時などに支障が出そうだ。

（どうしてカノンの実技試験の相手が俺になるんだ……？）

しかしこれは納得できない。
どれだけ優秀な成績を上げているとはいえ、どうして受験生の試験相手が同じ受験生なのだろうか？　ふざけているとしか思えない。教育委員会に訴えるぞ、と叫びたいのだが、観客席や試験管の先生方、なにより相対するカノン（クロノス先生は何時の間にか試験管席に戻った）が放つ空気が許してくれない。

「勝ちます！　あなたに！！」

これが巷で噂のデュエル脳というヤツだろうか？
すっげぇ～、たかがカードゲームにここまで熱意をつぎ込むことが出来るのには賞賛に値するかもしれない。何せこのデュエルに負けたら自殺しそうなほど、カノンの瞳は鮮烈に俺を貫いている。
あまりにも馬鹿馬鹿しすぎて大笑いしてしまいそうだ。もしかしたらＧＸの世界トリップした登場人物たちも同じような気持ちだっ

たのかもしれない。
だけど、
「カノン、一つだけ言っておくぜ」
楽しい。
こんなバカなことは元の世界じゃやったことはない。
たかだか1パック150円のカードを開けるときに真剣になり、40枚やそこらのデッキから一枚カードを引くだけで手を震わせたり、相手のライフポイントを0にする瞬間感極まって叫んだり……
……そんなバカなことしたことはない。
だからやってみたい。
「このデュエルはお前にとっては重要かもしれないけど、俺にとっては大した問題じゃない」
こういう考え方をするのを厨二病というのだっけ？
でもいいじゃないか。
元の世界とは違う場所にいて、元の世界とはまったく常識すら異なって、元の世界では出来ないことが出来る。
そんな素晴らしい状況は楽しむべきだ。死なない程度なら、尚更。
「それでも、勝つのは俺だ」
そして俺はデュエルディスクを構えた。
デッキの内容は把握している。元のデッキとは大分風変わりしていたが、アニメや漫画のオリジナルカードが多数盛り込まれていた。
相手は『代行者』。不足は無いが、敗北する気もサラサラ無い。
そして神聖なる決闘（デュエル）は始まった。

「「デュエル！！」」

第三話「実技試験」（後書き）

主人公は厨二病（笑）
ちょっと現実からトんで来たキャラクターらしく無さ過ぎましたね。
少し台詞が支離滅裂。そのうちスキルが上がったら修正するかもしれません。
次回はアニメオリカと漫画オリカが大量登場です。だって万丈目のおかげでドラゴン族のサポートって困らないんです（笑）
では次回もお楽しみに。

第四話「代行者ＶＳドラゴン！　入学を賭けた、実技試験！」（前書き）

更新遅れて申し訳ありませんでした。言い訳は後書きで。
それと今回から題名をＧＸっぽく変えてみました。
後、漫画オリジナルのチートカードがわんさか登場しますので、苦手な人はご注意ください。
もう和音のデッキが漫画版万丈目のドラゴンデッキになってる（笑）

第四話「代行者ＶＳドラゴン！　入学を賭けた、実技試験！」

第四話「代行者ＶＳドラゴン！　入学を賭けた、実技試験！」

～ＳＩＤＥ　雨宮和音～

「私の先攻！　ドロー！！」

くっ、先行は取られたか……。
やはりまだこの世界の先攻後攻の決め方には慣れていないせいか、対戦相手よりも一歩行動が遅れてしまう。
思わずジャンケンをしそうになったぜ。

「雨宮さん、私のデッキの内容は知っていますね」
「ああ。さっき、カノンが口を滑らせていたからな」
「そこはかとなく馬鹿にされた気分ですが……なら遠慮なくいきます。私は手札から《天空の使者　ゼラディアス》を墓地へ送り、デッキからフィールド魔法《天空の聖域》を手札に加え、発動！！」

一瞬、試験会場が巨大な光によって包まれる。
そしてその光が晴れると、風景は一変、雲の上に存在する神殿の前に俺とカノンは立っていた。

「さらに私は、《コーリング・ノヴァ》を守備表示で召喚。カードを二枚伏せてターンエンド」

召喚されたのは天使族専用のリクルーター。
こいつは普通のリクルーターとしての能力のほかに、≪天空の聖域≫がフィールド上に存在する時、デッキからレベル五の上級モンスター≪天空騎士パーシアス≫を特殊召喚できる、厄介な能力を持っている。

（俺の手札に《天空の聖域》を破壊できるカードは無い……。なら、最初から飛ばさせてもらうか！！）

さらに厄介な『代行者』モンスターが場上（フィールド）に並べられる前に、出来る限り攻めておきたい。

そのためのカードはすでに、手札にある。

「俺のターン。ドロー！　俺は手札から魔法カード≪トレード・イン≫を発動。このカードは、手札からレベル八の《トライホーン・ドラゴン》を墓地へ送り、カードを二枚ドローする。さらに《天使の施し》を発動。カードを三枚ドローし、その後手札から二枚捨てる」

「いきなり手札交換ですか？」

カノンが訝しげにこちらを見る。
そうだった。この世界では初ターンでの手札交換は馬鹿にされる。その証拠に、姿は見えないものの、観客席から俺を笑う声が聞こえた。
しかし違う。上級ドラゴン召喚の為に、三枚ものドラゴンを墓地へと送ったのだ。

「俺は手札から《死者蘇生》を発動。墓地の《ラヴァ・ドラゴン》を守備表示で特殊召喚。さらにこいつの効果発動！　守備表示で存

在するこのカードを生贄に捧げることで、墓地及び手札からレベル３以下のドラゴン族モンスターを一体ずつ特殊召喚できる！！　俺はこの効果により、墓地から《ドレッド・ドラゴン》、手札から《仮面竜》を特殊召喚！」

《ドレッド・ドラゴン》ＡＴＫ１１００
《仮面竜》ＡＴＫ１４００

「くっ、上級モンスターの……」
「生贄素材だ！　二体のドラゴンを生贄に《タイラント・ドラゴン》を召喚する！！」

《タイラント・ドラゴン》ＡＴＫ２９００

「バトル！　《タイラント・ドラゴン》で《コーリング・ノヴァ》に攻撃！」
「《コーリング・ノヴァ》の効果発動！　このカードが戦闘によって破壊された時、デッキから光属性・天使族の攻撃力１５００以下のモンスターを一体特殊召喚することが出来る！」
「だが《タイラント・ドラゴン》は相手場上（フィールド）にモンスターが存在する場合、一度のバトルフェイズで二度の攻撃が可能！」
「知っています。だから私は二体目の《コーリング・ノヴァ》を特殊召喚！」

流石にこんなところで違うモンスターを召喚するようなことはしないか……。

「なら続けてバトルだ！　《タイラント・ドラゴン》で再び《コーリング・ノヴァ》に攻撃！」
「戦闘破壊された《コーリング・ノヴァ》の効果発動！　デッキか

ら《力の代行者　マーズ》を特殊召喚」

《力の代行者　マーズ》ＡＴＫ０

「このタイミングでマーズ……？」

おかしい。こいつは自分のライフポイントが相手より上回っている場合、その差額分攻撃力をアップさせるモンスターだ。

ライフポイントが同率の今の状況では攻撃力０のまま……。

「……バトルフェイズを終了する」

と、すればあの三枚の内、どれかがライフ回復系かバーン系のカードだろう。

おそらく次のターン、攻めに来るはずだ。

「カードを二枚伏せる。さらに手札から速攻魔法《超再生能力》を発動。このカードの効果は、このターン手札から捨てた、もしくは場上（フィールド）で生贄に捧げたドラゴン族モンスターの数だけエンドフェイズにカードを一枚ドローする。俺がこのターン墓地へ送ったドラゴンは五体、よって五枚ドロー。これで俺はターンエンドだ」

「私のターン。ドロー！　私は《神秘の代行者　アース》を召喚。その効果は召喚に成功した時、デッキから代行者一枚を手札に加えることが出来る。でも……、」

「《天空の聖域》が発動中は《マスター・ヒュペリオン》も手札に加えることが出来る、だろ？」

余裕ぶって説明して見せたが、やばい。

あのモンスターは些か以上に厄介だ。

「知っているのなら話は早いです。私はデッキから《マスター・ヒュペリオン》を手札に加え、場上（フィールド）の《神秘の代行者　アース》をゲームから除外し、《マスター・ヒュペリオン》を手札から特殊召喚します！」

《マスター・ヒュペリオン》ＡＴＫ２７００

くっそ。タイラントには罠（トラップ）カードに対する耐性はあるものの、モンスター効果には弱い……！！

「では《マスター・ヒュペリオン》の効果発動！　墓地の天使族・光属性モンスター一体をゲームから除外することで、相手場上（フィールド）のカードを一枚破壊できます！　『ソーラー・アウト』！！」

《マスター・ヒュペリオン》の翼から放たれた光が、俺の《タイラント・ドラゴン》を貫き、破壊する。

「さらに《マスター・ヒュペリオン》は《天空の聖域》が発動している最中、この効果を二度発動することが出来る。伏せてあるカードを一枚破壊させてもらいます。『ソーラー・アウト』！！」

「かかったな！　罠発動（トラップ）《因果切断》！　手札を一枚捨てて、相手場上（フィールド）のモンスター一体をゲームから除外する！」

「カウンター罠（トラップ）《神罰》！　《天空の聖域》が存在している最中に発動可能。相手の魔法（マジック）・罠（トラップ）・モンスター効果のどれかを無効にし、破壊します！」

「なっ、このタイミングで……っ！？」

さっきのターン、俺の上級モンスター召喚を阻止せず、自分のターンで攻めることを考えてとっておいたのかよ！　顔に似合わず、随分と攻撃的なやつだな、オイ！

「ではバトルさせてもらいます！　《マスター・ヒュペリオン》で雨宮さんにダイレクトアタック！！」
「なら、永続罠（トラップ）《リビングデッドの呼び声》発動！　墓地から《トライホーン・ドラゴン》を攻撃表示で特殊召喚！」

《トライホーン・ドラゴン》ＡＴＫ２８５０
……さっき《トレード・イン》で落とした際にも思ったが、何故入っているんだろう？　《青眼の白龍》の代わりか？　まぁ、サポートカードも多い闇属性だからよしとしよう。

「……《マスター・ヒュペリオン》よりも攻撃力が高い、ですね。攻撃は中止します」
「残念だったな、カノン。このターン、ダメージを与えられなくて」
「いいえ。まだですよ」

にっ、とカノンは笑う。

「永続<ｒｕｂｙ>（トラップ）<ｒｂ>罠<／ｒｂ><ｒｐ>（<／ｒｐ><ｒｔ>女神の加護<／ｒｔ><ｒｐ>）<／ｒｐ><／ｒｕｂｙ>発動！」
「なに！？」
「私はライフポイントを３０００回復。しかしこのカードが場上（フィールド）を離れた時、私は３０００のダメージを受けます」

カノンＬＰ４０００→７０００
これは所謂（いわゆる）ライフ銀行のカードだ。一時的ながらライフポイントを大きく回復し、破壊された時に回復した分と同じダメージを受ける。
しかしカノンの狙いはライフ回復ではない。

「そして《力の代行者　マーズ》は《天空の聖域》が発動している時、自分のライフが相手のライフを上回っている分だけ攻撃力を上昇させます！」

《力の代行者　マーズ》ＡＴＫ０→３０００

「《力の代行者　マーズ》で《トライホーン・ドラゴン》を攻撃！『ホーリー・ブレイズ』！！」

「ぐあっ！！」

和音ＬＰ４０００→３８５０

《力の代行者　マーズ》ＡＴＫ３０００→３１５０

さらにライフポイントが削られたことによって、マーズの攻撃力が上昇する。

「ターンエンドです」

「俺のターン――「オイオイ、これであの受験番号６３番も終わったな」」

「ああ。これじゃあ、試験の時の１ターンキルもまぐれだったんじゃねぇの……？」

むっ。外野がうるさい。

確かに状況は不利だが、相手フィールド上には伏せカードが無く、並べられているのも大した耐性を持たないモンスター（一応、マーズは魔法（マジック）耐性を持つが、俺のデッキにモンスター除去魔法（マジック）はない）だ。

さっきの《女神の加護》は少しビックリしたが、まだ慌てるようなタイミングではないのだ。

大体手札が５枚もあり、俺のデッキが上級モンスターの特殊召喚に秀でているのは、さっきのデュエルで分かっていることなのだか

ら、まだ挽回の余地があると何故わからないのだろうか？

「――ドロー」

いいぜ。なら見せてやるよ。漫画やアニメオリジナルカードで強化されたドラゴンデッキの真価を！

「手札から魔法（マジック）カード《竜の嗅覚》発動！　相手の場上（フィールド）に二体以上のモンスターが存在し、俺の場（フィールド）にモンスターがいない時、手札からドラゴン族を一体特殊召喚できる！」

来い！　俺のエースカード！！

「深き闇より来たれ！　《ダークエンド・ドラゴン》！」

《ダークエンド・ドラゴン》ＡＴＫ２６００

漫画版万丈目が使っていた上級ドラゴン。残念なことに《光と闇の竜》はデッキに入っていなかったが、《ライトエンド・ドラゴン》と共に、このデッキのエースカードだ。

「また上級ドラゴン……！？　しかも、見たことも無い……」

「《ダークエンド・ドラゴン》の効果発動。攻・守力を５００ポイントずつ下げて、相手モンスターを一体、墓地へと送る！　俺は《力の代行者　マーズ》を選択。『ダーク・イヴァポレイション』！！」

《ダークエンド・ドラゴン》ＡＴＫ２６００→２１００　ＤＥＦ２１００→１６００

「え、ヒュペリオンじゃない……？」

ダークエンドから放たれた闇にマーズが飲み込まれていく中、カノンは不思議そうに呟いた。

強力な破壊効果をもつヒュペリオンではなく、攻撃力が高いだけのマーズを優先する。これをプレイングミスだと思ったのか、観客席から失笑が聞こえた。

が、当然この先も考えてある。

「俺は《ボマー・ドラゴン》を攻撃表示で召喚」

《ボマー・ドラゴン》ＡＴＫ１０００

このモンスターを召喚した瞬間、カノンの表情が変わる。

観客席からは「なに雑魚カードを攻撃表示で召喚しているんだ」と嘲弄が聞こえるが、カノンはどうやらこのカードの効果を知っているらしい。

「ぐっ、自爆特攻ですか！？」

「正解。俺はダメージ受けないけどな。《ボマー・ドラゴン》で《マスター・ヒュペリオン》へ攻撃！　そして効果！　このモンスターの戦闘では互いのダメージが０になり、このモンスターを戦闘で破壊した相手のモンスターを破壊する！」

「きゃ、きゃあああああっ！！」

「これでカノンの場はガラ空きだ！　《ダークエンド・ドラゴン》でダイレクトアタック！　『ダーク・フォッグ』！！」

カノンＬＰ７０００→４９００

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ」

これで戦況は逆転。
これには観客席の連中も驚いたのか、先程とは違った喧騒が会場内を包んで――――、
「……負けない」
消えそうなほどか細い呟きが聞こえた。
「駄目です。ここでは負けられない。入らなくちゃいけないんです。約束があるから。『あの人』との。ずっと昔に。だからっ、だからっ、だからっ！！」
言葉は徐々に大きくなっていく。
篭められた思いは強く、単語一つ一つが口から吐き出されるたび、カノンの瞳に激情の色が宿る。
「絶対に、負けないっ！！　私のターン、ドロー！！」
その声は最早、絶叫に等しかった。
驚愕や好奇のざわめきに包まれていた会場内を一瞬で静寂へと変化させ、聞こえるのはカードをドローする音と絶叫の残響だけ。
そしてその残響が消えるよりも早く、カノンが魔法（マジック）を発動させる。
「《強欲な壺》を発動！　その効果により二枚ドローします！」
このタイミングで《強欲な壺》。まさにアニメ補正とでも言うべきなのだろうか？　おそらくこのドローに全てを賭けているのだろう。
逆転の一手か。はたまた運命に見放されての敗北か。
どちらにせよ、このドローで決まる。

「ふぅ」

カノンは目を瞑って一息だけ吐き出し、そしてデッキトップ二枚に指を添える。

そして、

「ドロー！！」

引いた。

「雨宮さん」

「なんだ？」

「この勝負、私が貰います」

「……やってみろ」

「ならお言葉に甘えて……。手札から《奇跡の代行者　ジュピター》を攻撃表示で召喚！」

《奇跡の代行者　ジュピター》ＡＴＫ１８００

「速攻魔法《光神化》を発動！　手札の天使族一体の攻撃力を半分にし、特殊召喚します。私はこの効果により《裁きの代行者　サターン》を攻撃表示で特殊召喚」

《裁きの代行者　サターン》ＡＴＫ２４００→１２００

「サターン、か」

「その様子だと、効果をご存知のようですね」

「ああ。《天空の聖域》が発動している時、そいつを生贄にして自分のライフが相手のライフを上回っている分、ダメージを与える効

果」

だがデメリットとして、効果を適用したターンはバトルを行う事が出来ない。

しかしその必要は無いのだろう。なぜなら……、

「そしてジュピターは墓地の『代行者』を除外して攻撃力を８００ポイントアップさせる効果を持ちます。が、それだけではありません。《天空の聖域》がある時、手札の天使族モンスター一体を捨てることで、除外されている光属性・天使族モンスターを一体特殊召喚する効果も併せ持っているのです」

つまりカノンが考えているのはこういうことだ。

まずサターンの効果を発動。俺とカノンのライフ差分のダメージを与える。そしてジュピターの効果でサターンを除外。それを蘇生させてさらに効果発動、といった感じだろう。

「だけど少しダメージが足りないな」

そう。ダメージはまず３８５０－（４９００－３８５０）＝２８００。そしてさらに２８００－（４９００－２８００）＝７００。

これではライフが少しだけ残ってしまい、次のターン、ジュピターの攻撃力は元の１８００へと戻り、手札０、伏せカード０の状態で戦わなくてはならない。

「その心配はありません。最後の手札は……《ホーリー・ジェラルド》。このカードは《天空の聖域》が発動している時、戦闘以外で墓地へ送られた時、ライフを１０００回復します」

それならばさらにダメージが追加されて俺のライフはゼロになる

だろう。

「これで私の勝利です。雨宮さんのブルー寮行きを阻んでしまうのが気が引けますが、私には負けられない理由があります」

「そうかよ。なら、もしもカノンが勝ったら夕食の時、ブルー寮の食事を少し恵んでもらえないか？　噂に聞くと、レッド寮の食事はマズイらしいからな」

「ふふっ。それぐらいなら、いいですよ」

その微笑を見ると、勝たせてやりないなぁ、と思った。

「では終幕です。楽しいデュエルでした……。《裁きの代行者　サターン》の効果発動！　雨宮さんに私とのライフポイント差分のダメージ！！　『ホーリー・ジャッジメント』！！」

雨宮ＬＰ３８５０→２８００

「そして《奇跡の代行者　ジュピター》の効果発動。墓地の《裁きの代行者　サターン》を除外して攻撃力を８００ポイント上昇。さらに手札から《ホーリー・ジェラル》を捨てて、除外した《裁きの代行者　サターン》を復活！　私のライフポイントは《ホーリー・ジェラル》の効果により、１０００ポイント回復します！」

カノンＬＰ４９００→５９００

《奇跡の代行者　ジュピター》ＡＴＫ１８００→２６００

《裁きの代行者　サターン》ＡＴＫ２４００

「これで終わりです！　再び《裁きの代行者　サターン》の効果発動！　『ホーリー・ジャッジメント』！！」

サターンの翼から放たれた光が俺に迫る。
おそらくカノンは自信の勝利を微塵も疑っていないのだろう。その瞳には後一歩で手が届きそうな勝利に対する喜びがある。
（だから勝たせてやりたいなぁ……）
おそらく、元の世界では遊びでデュエルモンスターズをやっていた俺と、プロデュエリストと言う栄誉ある職業が存在するこの世界で育ったカノンでは、デュエルに対する熱意が違う。
大体、このデュエルで負けても俺は合格できるだろう。カノンに負けたとはいえ、教師相手に1ターンキルをしたのだ。ラー・イエローからは落とされるかもしれないが、確実にデュエルアカデミアに入学できるはずだ。
それでも――――、
（負けられない。わざと負けるのはカノンを馬鹿にする行為だ。元の世界ならまだしも、この世界で決闘（デュエル）するからには、どんな相手にも全力でやらせてもらう！！）
そして俺は、伏せてあった最後の罠（トラップ）カードを発動する。
「罠（トラップ）発動《不死の竜》！　このカードは墓地か除外されているドラゴン一体を蘇生することが出来る。俺は《因果切断》のコストで墓地に送られた、《マテリアルドラゴン》を特殊召喚！」
雨宮ＬＰ２８００→４９００
《マテリアルドラゴン》ＡＴＫ２４００
「え？」

カノンが目を見開く。
《マテリアルドラゴン》。モンスター破壊を手札一枚をコストに防ぐことが出来る効果と、あらゆる効果ダメージを敵味方問わず回復へと変換する効果を持つ上級ドラゴン。
それを何故、最初のサターンの効果にチェーンしなかったのか。
「まさ、か……。最初から、全て狙って……っ！？」
「ああ。サターンとジュピターのコンボは強力だ。ライフ差が離れれば離れるほど、強力になるサターンの効果の連続発動。大抵の奴はこのコンボで終わりに出来るだろうな」
まぁ確かに、元の世界じゃあ『ヘル・サターン1キル』などと言う1ターンキルコンボデッキが存在するぐらいだからな。
「だけど俺は、わざと『二回目』のサターンの効果発動を狙った」
「そうか……。もしも一回目の効果発動時、《マテリアルドラゴン》を召喚されていたら、私はジュピターの効果で別のモンスターを召喚して盾にしていた……。それを防ぐために、あえて一回目のダメージは受けた……」
その通りだ。
カノンのライフポイントは５９００。これを次のターンで削り取るには、モンスターの盾がいては邪魔なのだ。
これでカノンは攻撃を行えず、俺のライフポイントを回復させるだけの結果に終わった。
「……完敗です」
おそらく悟ったのだろう。
俺の手札に、確実にカノンを倒すことが出来るカードが存在して

いることに。

「俺のターン。ドロー」

だから俺は――――、

「手札から魔法(マジック)カード《龍の鏡》を発動。墓地の《ラヴァ・ドラゴン》・《仮面竜》・《ドレッド・ドラゴン》・《タイラント・ドラゴン》・《ボマー・ドラゴン》の五体をゲームから除外し、《F(ファイブ)・G(ゴッド)・D(ドラゴン)》を融合召喚する！！」

《F・G・D》ＡＴＫ５０００

最後の最後まで、全力でカノンを潰す！！

「前のターンは《竜の嗅覚》の効果によって特殊召喚は封じられていた……。でも、このターンはそんな制限は無い。これでラストアタックだ、カノン」

カノンは伏せていた顔を上げる。

泣いて、そして笑っていた。

「楽しい、デュエルでした」

「……《ダークエンド・ドラゴン》の効果で《奇跡の代行者　ジュピター》を墓地へと送る！　『ダーク・イヴァポレイション』！！」

《ダークエンド・ドラゴン》ＡＴＫ２１００→１６００　ＤＥＦ１６００→１１００

「そして《マテリアルドラゴン》でダイレクトアタック！！　《ロストマテリアル》！！」

カノンＬＰ５９００→３５００

「ラストアタック！　《Ｆ（ファイブゴッド）・Ｇ（ゴッド）・Ｄ（ドラゴン）》の攻撃！」

楽しかった、か……、

「ファイブ！」

カノン、

「ゴッド！」

俺もだ。

「ブレス！！」

カノンＬＰ３５００→０

～ＳＤＥ　星崎カノン～

私は全力で勝負を挑みました。
そしてその上で敗北しました。

「あ」

だから今までの緊張が抜けたせいでしょうか。ソリッドビジョンが解除され、《天空の聖域》が消えて元の試験会場に戻ると同時に、がっくりと膝をついてしまったのです。

（……ごめんなさい。私、勝てませんでした）

心の中で『あの人』に謝罪します。

やっぱり私じゃあ駄目だったみたいです。

幾つもの大会で優勝して、それなりに名が知れたデュエリストになり、これで『あの人』と真正面から向き合える――――そう過信していました。

「やっぱり遠いなぁ……」

世界にはこんなにも強いデュエリストがいる。

まだまだ『あの人』には及びません。

「カノン、楽しいデュエルだったぜ」

だから努力しようと思います。

まずは『あの人』じゃなくて、目の前にいる雨宮さんを超えられるように。

「私は来年もデュエルアカデミアを受験します。だから雨宮さん、もしも来年、私が今度こそ合格できたら、もう一度デュエルを「シニョール和音、素晴らしいデュエルだったノーネ！」」

……メチャクチャタイミングが悪いですね、クロノス教諭。折角、

私が雨宮さんに一世一代の告白（浮ついた意味ではアリマセン！断じて！！！）をしようという時に、割り込んでくるなんて。

「他の先生方との協議の結果、アナタのブルー寮入学は確定しましたノーネ。今、鮫島校長の許可を取っているところでスーノ」

やっぱりですか……。

この人の実力は数多の大会に出場してきた私でも、早々お目にかかれるものではありませんでした。

おそらく並大抵のブルー生徒では歯が立たないでしょう。

「あ～、そのことなんですけど……」

ん？　雨宮さんはさも申し訳なさそうに、クロノス教諭に頼み込むように頭を下げた。

「ど、どうしましたノーネ？」

「一つだけお願いがあります。俺とカノンを――――」

そして次に放たれた言葉に、私とクロノス教諭が目を見開いて同時に叫んだのでした。

第四話「代行者ＶＳドラゴン！　入学を賭けた、実技試験！」（後書き）

今週の最強カード！
《ダークエンド・ドラゴン》
星八　ドラゴン族　闇属性
ＡＴＫ２６００　ＤＥＦ２１００
効果モンスター
このカードを生贄召喚する場合、生贄素材は全てドラゴン族でなければいけない。
１ターンに一度、このカードの攻撃力と守備力を５００ポイントずつ下げることで、相手モンスター一体を墓地へと送ることが出来る。

和音「サポートカードの多いドラゴン族・闇属性のモンスターだ。星八だからトレード・インにも対応しているし、墓地からの特殊召喚も可能だぜ！　効果を使い終わったら、禁じられた聖杯やあまのじゃくの呪いで攻撃力を戻してフィニッシュだ！！」

申し訳ありませんでした！！！！！！！！！
リアルでテストや病気やらで執筆作業が一向に行えず、気付けば二週間以上も放置状態でした。コレはマズイ、とテストが終わって二日で書き終え、慌てて投稿したのです。
今後、このような事がないように気をつけますので、どうかよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6364t/

遊戯王GX－竜の決闘者－

2011年10月7日19時26分発行